

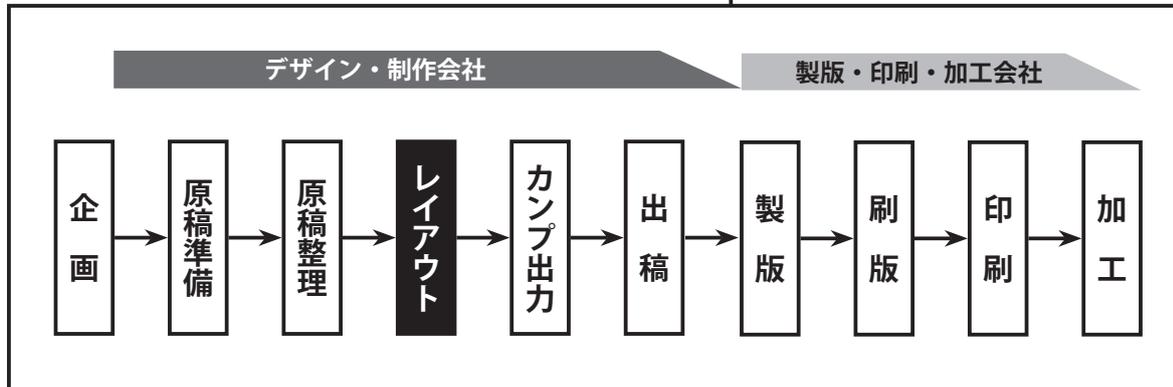
# 最新 DTP ワークフロー制作トレーニング 目次

<b>1. DTP ワークフロー概論</b> .....	<b>1</b>
1.1. 従来ワークフロー .....	1
1.2. 最新ワークフロー .....	2
1.3. Adobe Creative Suite CS6 概要 .....	4
<b>2. DTP 制作に影響する新機能</b> .....	<b>5</b>
2.1. 主な新機能 (Illustrator CS6) .....	5
2.2. 主な新機能 (Photoshop CS6) .....	11
2.3. 主な新機能 (inDesign CS6) .....	14
2.4. 主な新機能 (Acrobat XI) .....	16
2.5. 主な新機能 (Bridge CS6) .....	21
<b>3. Adobe Illustrator 演習</b> .....	<b>24</b>
3.1. 素材制作演習 .....	24
3.2. Adobe Illustrator データのチェックポイント .....	25
<b>4. Adobe Photoshop 演習</b> .....	<b>29</b>
4.1. 素材制作演習 .....	29
4.2. Adobe Photoshop データのチェックポイント .....	32
<b>5. Adobe InDesign 演習</b> .....	<b>33</b>
5.1. 制作演習 .....	33
5.2. PDF/X 書き出し .....	35
5.3. PDF 書き出し注意事項 .....	39
<b>6. Adobe Acrobat 演習</b> .....	<b>41</b>
6.1. 印刷工程で利用する Acrobat 機能 .....	41
6.2. プリフライト .....	42
6.3. オリジナル設定 .....	44

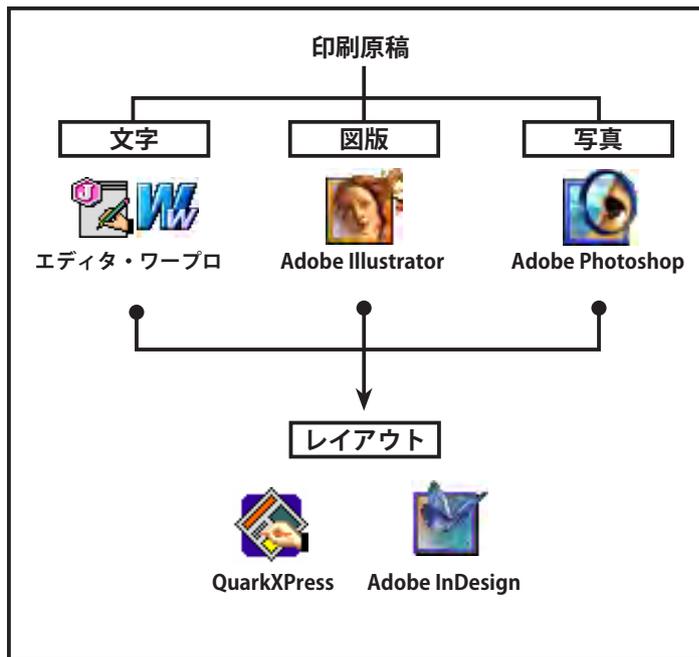
# 1. DTP ワークフロー概論

## 1.1 従来 DTP ワークフロー

### ■従来の制作～印刷のワークフロー



### ■従来の印刷物制作ワークフロー



従来、印刷物制作における素材データ（文字・図版・写真）は、次のようなファイルフォーマットでやり取りされていました。

- ・文字…テキストデータ (.txt) や Word データ (.doc)
- ・図版…Illustrator データ (.ai/.eps)
- ・写真…JPEG・TIFF・Photoshop EPS

そして、これらの素材を、レイアウトソフト（QuarkXPress・InDesign 等）で印刷物データを制作していました。

### ◆ツール群のバージョン

左図では、画像・イラストの編集やレイアウトデザインに使用されている一般的なツール群を挙げてあります。

現在、デザイン制作・印刷製版業務で使用されている各ソフトウェアの主なバージョンは、下記です。

(2013年6月現在)

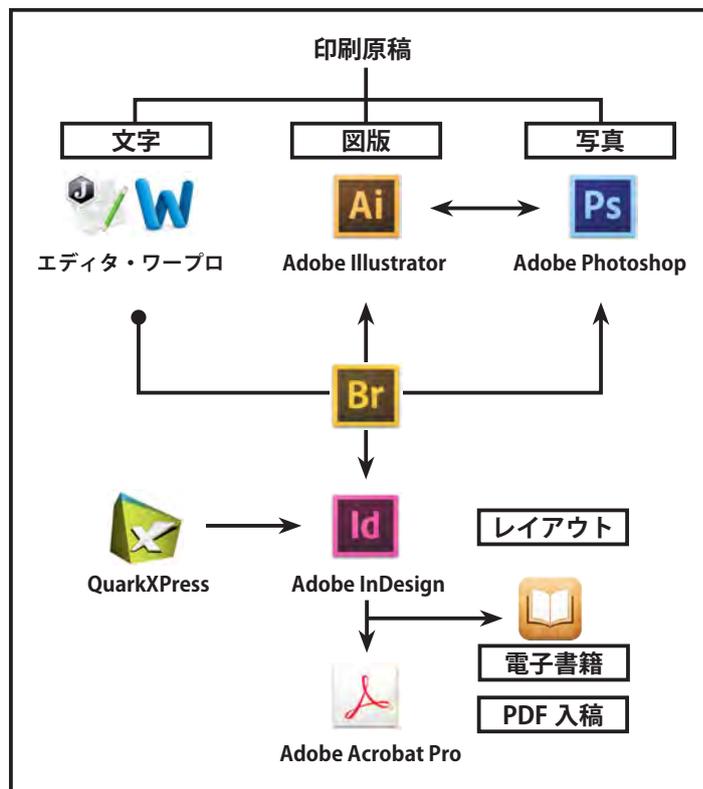
- ・ Adobe Illustrator CS2 ～ CS6
- ・ Adobe Photoshop CS2 ～ CS6
- ・ QuarkXPress 6.5、8.0、9.0
- ・ Adobe InDesign CS2 ～ CS6
- ・ Mac OS 9.2、10.3 ～ 10.9
- ・ Windows 2000、XP、Vista、7

本講座では、以下環境にて制作実習作業を行います。

- ・ Adobe Illustrator CS6
- ・ Adobe Photoshop CS6
- ・ Adobe InDesign CS6
- ・ Mac OS X 10.7 or Windows 7

## 1.2 最新 DTP ワークフロー

## ■最新の印刷物制作ワークフロー



## ■最新 DTP ワークフローのポイント

## その 1. Adobe Bridge が果たすハブ

Adobe Creative Suite 2 以降にバンドル（標準搭載）されているソフト『Adobe Bridge』は、Adobe 製品群のハブ（中継）としての役割を果たします。

## その 2. ネイティブ入稿から PDF 入稿へ

従来、印刷業界では、入稿データにおいて次のようなトラブルがありました。

- ・文字化け、リフロー  
（フォント環境の違い）
- ・配置画像のリンク切れ、配置画像のファイル添付忘れ  
（ファイル形式の仕様、交換者間の人的ミス）
- ・色がおかしい  
（オーバープリント、トラッピング設定ミス）
- ・色が合わない  
（カラースペースのミス:RGB, ICC プロファイル設定ミス）

## ◆ワークフローの傾向

印刷物原稿が、アナログからデジタルに変わった段階を第一世代とすると、現在は、第二世代に入っています。

第一世代では、制作ツールのネイティブデータ（制作ツールのファイル形式）での入稿が一般的でした。配置画像を添付し、使用フォントも明記し、印刷所のないフォントを使用している場合には、フォントをアウトライン化して入稿していました。

第二世代では、制作ツールが何であれ、入稿データを印刷用の版を出力する品質の PDF へ変換し、PDF 内に画像・フォントを埋め込んでいます。

このようなトラブルを回避するため、印刷データ交換を行うデザイン制作会社、印刷会社間では、データ入稿ルールを決めてやり取りしていました。

日本では、主にネイティブデータ（アプリケーション独自フォーマット）でやり取りされていますので、データ交換や DTP データ出力に際しては、個々のソフトウェアやハードウェアの仕様などの技術的なスキルが求められます。

このような煩雑な環境の違いを吸収して、安全な出力を可能とするフォーマットとして、PDF/X という規格（印刷データ交換用フォーマット）が生まれました。

この PDF/X は、近年、印刷物データの入稿形態として注目されています。

また、印刷版出力機器でも PDF 出力に対応する機器が出揃い、出力環境が整ったことから、徐々に、PDF 入稿を推進する企業が増えてきています。

### その 3. 入稿後修正のないデータであること

ネイティブデータでの入稿が PDF 入稿へと変化すると、制作作業を納期ぎりぎりまで行うことができる一方、データに対する責任の所在は、すべて制作側へと移行します。

### その 4. クロスメディア展開へ

DTP 環境で制作したレイアウトデータおよび素材データは、各デバイス向けに利用される機会が増えてきました。

Web への再利用はもちろんのこと、電子書籍端末、スマートフォンへの配信も視野に入れた CMS（コンテンツマネジメントシステム）の活用や、開発ツールやコンテンツ制作ツールの併用によって、クライアントが望む印刷物&コンテンツを提供するためのワークフローの再構築が望まれています。

#### ◆ PDF/X

PDF/X は、印刷用原稿の交換用に適した PDF の仕様です。

詳細は、P.17 参照。